

砥部焼の伝統技術を継承しながら、独自の解釈で緊張感あふれる器を創出

山本和哉 愛媛／砥部焼作家



和将窯

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」主催、レクサスは、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりを応援する。

本プロジェクトは2016年放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト）、アート・プロデューサー）下川一哉氏（意匠工研究所）らをサポートメンバーに発足。



プレゼンテーション

若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやWebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月17日、プレゼンテーションにて

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。

世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また、商談会の終盤では、チームジャパンとのコラボレーション企画「LIFE WITH NEW TAKUMI」新しい匠、新しい暮らし」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。

「伝統を守りながら新しい感覚やテクノロジーを吹き込む。地域の特性を深めながらその魅力を世界へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生を、地方創生×モノづくりの視点で表現するプロジェクト。愛媛県選出の匠、砥部焼作家の山本和哉さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

オリジナル文様の砥部焼を生み出す

山本さんの創作活動の拠点である「和将窯」（愛媛県伊予郡松前町）には、洗練された文様の白磁が並ぶ。和将窯の特徴はその文様にある。絵筆の勢いに任せたフリーハンドの線描でありながら、均整の取れた流麗な濃紺の文様は、音楽の流れる様を表現しているようにも見えることから、練習曲を意味する「エチュード模様」と呼ばれている。比較的薄手で白と黒を基調にしたスタイリッシュな作風は、厚みのある白磁に薄い藍色の呉須で絵付けしたいわゆる伝統的な砥部焼とは一線を画している。

1998年に父親が立ち上げた窯元で作陶を始めた当時は、草花などの伝統的な絵付けをしていたという山本さんが、エチュード模様をあしらった作品で2007年の愛媛の陶芸展最優秀賞を受賞。日本工芸展四国支部展でも入賞を果たす。以後、エチュードシリーズとして食器や花器といった日用雑器を製作。飲食店や陶器販売店からの受注生産以外にも、ドクロをモチーフにした時計やチェスセットなど、独創的なアートオブジェクトも手掛けている。

新たな陶器の形を求めて試行錯誤

当初プロジェクト案として山本さんが思い描いていたの



無心で土と向き合う

は、これまでにない新しい形の茶わんだった。本来、茶わんの底にある高台を作らず、側面から底面に向かってL字型の幅広い取っ手を付けたもの。高台自体をなくすことで、洗って伏せたときにくぼみに水がたまらず、自立して横向きに置くことも可能だった。

試作品を見た生駒氏からは、造形の面白さや美しさについては評価されたものの、そもそも横向きに立てて置く必要があるのか、茶わんに取っ手が必要か、和だけではなく洋の食にも対応できる方が使いやすいのでは、などと厳しい指摘が相次いだ。山本さんなりに機能性とデザイン性を考慮



エリア・コンサルティング



エチュード模様を描く

扱ひ、作品に生かしていけばいいのかと頭を悩ませ、何度も試作を重ねた。そして、新たな造形美を求めて生み出されたプロダクトが「tension」だ。その名の通り、緊張感のある硬質なフォルムが特徴。スタンド風の取っ手が支える円すい形のカップ、表面を平らに成形した角皿、いずれにもエチュード模様を配し、洗練された印象を与える。

飲食店での使用や贈答品としての利用を想定して、カップは大小2種用意した。高さのある方は飲み物を、低い方はソースカップとして使える。今回、あえて釉薬を少なくし、風合いを変え、手法にも挑戦した。角皿の表面は素焼きのようなざらっとした手触りで、上にカップを置いても滑りにくい。ランチプレートやスイーツプレートとして、組み合わせ次第で、さまざまな料理とのマッチングが楽しめる。伝統と革新が共生する新しい砥部焼が完成した。

プロジェクト期間中はプロダクトのことがずっと頭から離れなかったという山本さん。

完成にこぎ着けられるのか、不安になったこともあったが、最終のプレゼンテーションが終わった今ほっとする気持ち、また違うものを作りたいという思いが膨らんでいると笑う。プロジェクトに参加したことで、陶芸家としての視野が広がり、創作の幅も広がった。全国にたくさん仲間ができて、刺激を受けたことは大きな収穫だったと話す。懇意になった匠とのコラボレーションや、全国の匠たちと共同での作品づくりにも意欲を燃やしている。また漠然とはあるが、愛媛ならではの特産品や素材と自身の作品との関わりを持たせる方法について思索している。

作陶に没頭するあまり工房に閉じこもりがちだったという山本さんだが、全国の匠たちとの交流の中で、ものづくりへの熱い姿勢を目の当たりにし、どんどん外へ飛び出して、もっと新しいことに挑戦し、発信して行かねばと前を向く。山本さんは今また、新たなスタートラインに立っている。



完成プロダクト「tension」

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め! 電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



山本 和哉 愛媛／砥部焼作家

1980年生まれ。20歳の頃、父の山本俊一氏が設立した「和将窯」にて手伝い始める。その後、砥部焼の伝統を生かしつつ、白と黒をコンセプトに独自のデザインアートを展開。2007年には愛媛の陶芸展で最優秀賞を受賞する。受賞したエチュード模様で、県内では一躍有名になり、エチュード模様をアレンジした新しいデザインを次々に作り上げ、2012年には5年連続受賞を達成。

